

# 子どもを産む という性を授かつた女性たちに 命の素晴らしさを伝えたい

*Human Document*  
ヒューマン・ドキュメント



矢島助産院 院長  
**矢島床子さん**

矢島助産院で出産した2組のご夫婦と、喜びをともにする矢島さんとスタッフの方々



やじま・ゆかこ●昭和20年、岐阜県生まれ。矢島助産院院長。助産婦。高山の日赤看護学校、東京の日赤助産婦学校を卒業。その後1年間、助産師として高山日赤病院に勤務。結婚を機に上京。しばらく専業主婦になるが、同46年より三森孔子助産婦の元で働く。62年、東京・国分寺のマンションの一室で矢島助産院を開院。平成4年、国分寺市東元町に移る。同10年「母子サロン」をオープン。17年「ファミリーサロン」をオープン。助産院で院長を務めるかたわら、地域の子育て支援、助産婦の教育や運動に尽力している。16年に医療功労賞を受賞。

少子化が叫ばれて久しい今、  
出産という視点で  
命の大切さを訴えている助産婦がいます。  
矢島床子さんは、  
自らの経験をいかし、  
「気持ちよいお産」の推奨と、  
地域で多くの女性たちが集まる  
スペース作りに奔走しています。

文=中本敦子

## 幸せに包まれたお産

うお産を介助してあげたいと、私は思つてあります」

「痛いよねー。『ふ、うん。ふー。うん』の呼吸よ。いいよー、上手だね！」

矢島さんのやさしい声に導かれ、新た

な命の誕生のときが訪れる。

「ほら、頭が見えてきたよ。はい、力を抜いて。そうそう。もう少しだから」

その瞬間、産婦はわが子を自らとり上げ、そのまま胸に抱き上げた。今までの苦しみがウソのように、そこには幸せな母の顔があつた。

矢島助産院の分娩室は四畳半の和室。まるで自分の家での出来事のように、お産が始まり、そのときを迎える。夫もいる。きょうだいたちも誕生の瞬間に立ち会う。

スタッフも含め、誰もが笑顔で迎えた赤ちゃんが、かわいい産声をあげている。そんな、幸せな光景が、矢島助産院ではずっと繰り返されてきた。

「お産というのは、何をしても痛いものです。その痛みに耐えて女性は子どもを産みます。陣痛が始またら助産婦がそ

ばについていてあげて、体をさすったり、励ましてあげたりすることで心も体も解き放たれ、気持ちよくお産ができると思うのです。

女性は思春期から更年期までホルモンに左右され生きなければならないでしょ。それに妊娠するという性をもつているわけです。そういう女性たちに寄り添

島さんは交通事故に遭つ。山道を車で運転中、カーブを曲がりきれず、一〇〇メートル近くも谷底に転落。行方不明となる。発見されたときは、頭蓋内出血で意識不明の重体。一週間、昏睡状態で生死の境をさまよつた。

「意識が戻つても、まっすぐ歩けない、右目が開けられないなどの後遺症が残りました。でも、私は勉強がしたかった。仲間が勉強を続いているのに、自分だけができない悔しさを味わい、なんとしてでも復学したいと強く思ったのです。

頭の手術をするために髪の毛をそりました。片目は完全に開かなくなってしまつて。頭を打つて逆行性健忘といつて物忘れがひどくもなりました。でも、どうしてでももう一度勉強をしたかつたのです」

一人上京し、渋谷の日赤に通い、助産婦の資格を取るべく勉強を始めた。

実は、矢島さんは上京する前に、病院に患者さんとして入院していた男性と退院後も文通をしていました。彼こそ将来のパートナーとなる人であった。病院への恩返しの意味もあり、助産婦の資格を取つ

その強い思いで、翌四月より看護学校に復学し、級友より一年遅れて卒業、国家試験に合格した。卒業後、母校で看護師として勤めていたところ、看護学校から助産婦の資格を取らないかと声がかかった。



医療功労賞を受賞のとき、ご主人とともに。長い道のりには、辛いこともあったが、今はお互いを支え合う関係になりました

## 「第一の出会い」は 交通事故

矢島さんは、岐阜県の山のなかの地で

七人きょうだいの五女として生まれた。

「私は高校のとき、医者になりたいと思つていましたが、大学に行くにはお金がかかる。家には迷惑をかけられないので、学費が免除される看護学校に行くことにしました」

看護学校二年生の夏休み、帰郷した矢

たあと、一年間産科病棟で働き、結婚のため学校を辞め、再び上京した。

## 恩師との出会いが

### 「第一の出会い」

結婚後は、仕事を続けず、専業主婦となつた。

「すぐ二人の子どもを授かりました

が、その頃の育児だけの生活は辛かつたですね」と、当時を振り返る。夫は会社人間で、朝帰りもしょっちゅう。もちろん、家事育児はすべて任せ。二人の子どもに振り回され、外に出ることもできず、イライラは募るばかり。何度も離婚しようと思つたことか……」

そんな矢島さんに、大きな転機が訪れた。

「子どもたちを公園に連れていくようになつて、少しは気持ちが晴れてくれました。そういうしていけるうちに、友人が『近くの助産院でお産があるから見に行かな』って誘つてくれたんです」

そのときの助産婦というのが、日本のラマーズ法の先駆者であり、矢島さんの恩師となる三森孔子さんであつた。夜遅く、自転車を走らせ、三森助産院に向かつた矢島さんは、大きな衝撃だつた。

「薄暗い部屋で、静かにお産をしているんです。それまで私は煌々と明るい病院でのお産しか知りませんでした。ラマーズ法で上手に産婦を誘導し、会陰切開も行なわざ体を傷つけないお産。そこでのお産は、学校でも習わない、病院勤務の助産婦は経験できない、自然なお産です。言葉では表現できないすごさを感じました。まるで『魔女との出会い』でした」

矢島さんにとって学ぶ強い意欲を与えてくれた「第一の出会い」が交通事故なら、三森さんとの出会いは再び助産婦の道を歩くきっかけとなつた「第二の出会い」といえる。

その後、矢島さんは一六年間、三森助産院で助産婦として勉強をさせてもらひながら働くことになる。

「私自身も、自宅で生まれてはいますが、私が勉強した教科書には、自宅分娩なんてありませんでした。だけど先生はそれをやっていたのです。当時はいわゆるヒッピーも多く、お金に困っている人も多

い世の中でした。玄関から入つたすぐのところに布団が敷いてあり、そこでお産もあつたし、鼠が出てくるようなところで食事をすることもあつた。今では考えられないようなことだけ、お金はなくともあたたかさが漂つていたんです。当然夫は立ち会つていたし、みんな幸せなお産でした。私が病院でしてきたことは何だつたんだろうと、ショックを受けましたね」

なかには、お金がなくて分娩代を払えず、着物やネックレスをおいていつたり、野菜を送つてくる人もいたという。三森さんは助産婦の仕事だけではなく、夫婦喧嘩の仲裁に入つたり、ときには必要な人にお金を貸してあげたりと、いわゆる昔ながらの地域の核となる人だつたと矢島さんは回想する。そんな恩師から学んだことは、学校での勉強の何倍も意義深いことだつたに違ひない。

## 苦しかつた

### 子育て経験を生かして

「四十歳になるときに、三人目を妊娠しました。上の二人は病院での出産でした

が、自宅での夫立ち会いの素晴らしいお産をずっと見ていましたから、今度こそは私も自宅で出産しようと決めました。いつもの匂いのなかで、夫がそばにいて、窓の外を見れば同じ風景が見える……、そんな環境でお産ができる幸せを自分も経験することができたのです。

夫がいそいそお茶を入れてくれるんで

すよ。上の子どもたちが学校から帰つて  
くると、下の子をあやしてくれたり。当

たり前の幸せを噛み締めました。何より

そのお産で、夫が変わりましたね。それ  
までは会社人間で、家事育児は一切やら

ない人でしたが、おむつを替えてくれた  
りするようになつて。それに子どもや私

にもやさしくなつたのです。きっと出産

を目の当たりにして、感じたことがあつ  
たのでしよう」

昭和六十二年十一月、三森先生はガン  
で急逝した。亡くなつた時点で、すでに  
お産の予約が入つてゐる産婦さんもいた  
ため、三森先生の元で働いていた助産婦  
が分担して引き継ぐことになつた。

矢島さんは、開業するときには、自分  
が育児中に辛い経験をしたため、お産が  
終わつた後も親子で集える「母と子の集  
いの場」を作りたいと思っていた。三森  
先生はお産の技術は高かつたが、赤ちゃ  
んやその後のお母さんのフォローはな  
く、それではいけないと心のなかで思つ  
ていたそうだ。

開業当初は国分寺のマンションの一室  
を診察室にあて、あとは自宅出産に出向  
くという形をとつてゐた。しかし、自宅  
出産は不安だから助産院を作つてほしい  
という声が上がり、また、夢である「母  
と子の集いの場」の実現のため、マンシ  
ョンを買い替えるなどの過程を経て、平  
成四年、今の場所に助産院を建てた。  
しかし、その直後に、近くのマンショ

ンでお母さんが一人の幼子を連れて、飛  
び下り自殺をしたという悲しい事件が起  
きた。

「新聞を読んで、本当に悔しかつたです。  
こんなに近くにいるのに、『ここにおい  
で』と言つてあげられなかつた……。もう  
う一度とそういうことが起ららないよう  
にしたいと強く思いました」

## すべての女性たちのために

昭和六十二年十一月、三森先生はガン

で急逝した。亡くなつた時点で、すでに

お産の予約が入つてゐる産婦さんもいた

ため、三森先生の元で働いていた助産婦

が分担して引き継ぐことになつた。

矢島さんは、開業するときには、自分  
が育児中に辛い経験をしたため、お産が  
終わつた後も親子で集える「母と子の集  
いの場」を作りたいと思っていた。三森  
先生はお産の技術は高かつたが、赤ちゃ  
んやその後のお母さんのフォローはな  
く、それではいけないと心のなかで思つ  
ていたそうだ。

開業当初は国分寺のマンションの一室  
を診察室にあて、あとは自宅出産に出向  
くという形をとつてゐた。しかし、自宅  
出産は不安だから助産院を作つてほしい  
という声が上がり、また、夢である「母  
と子の集いの場」の実現のため、マンシ  
ョンを買い替えるなどの過程を経て、平  
成四年、今の場所に助産院を建てた。

しかし、その直後に、近くのマンショ

ンでも育てながら、元気に社会に出ら  
れるきつかけの場でありたいと願つてい  
るのです」

あるお産のとき、矢島さんが陣痛で苦  
しんでいる産婦さんにつきつきりで腰を  
さすつていると、急にしきしきと泣き出  
した。彼女があとでその理由を感想文に  
書いた。「七年前に亡くなつた母のことを思い出  
して泣けてしまつた」と書いていたそ  
うだ。

産婦さんは決して、「お父さん、痛い  
よー」とは言わない。一番辛いときに口  
に出る言葉は「お母さん、痛いよー」な  
のだ。

私は助産婦として、気持ちよいお産、  
そして子どもを育てていく喜び、女性と

しての喜びを、これからも伝え続けてい  
きたいと思っています」

「やつぱり、お産をして命をつないでい  
く當みは、母親とのつながりのなかにあ  
ると思うんです。私の母が昔、『結婚は  
しなくて子どもだけは産みなさい』と  
よく言つてました。その意味が今になつ  
てよくわかるようになりました。母は無  
学でしたが、七人の子どもを産んで苦勞  
もしたでしょうけど、命をつないでいく  
喜びを感じ、それを娘の私に伝えたか  
たのでしょう。



後輩の教育にも力を入れる矢島さん。講演会などにも積極的に参加している



## 母と子のサロン 矢島助産院

Tel 042-322-5531  
東京都国分寺市東元町1-40-7  
JR中央線 国分寺駅より徒歩7分  
ホームページアドレスは、  
<http://www.yajima-j.net/>